

ひとつの専門を持ち、それを極め続けなさい。 違う専門を持つ人と出会った時、そこに新しいものが生まれる。

ひとつの専門を極め続けることが大事

「学生たちには、『ひとつの専門を持ちなさい。そして、それを極める心をいつまでも持ち続けなさい』と言いたいですね」
 どんな学生を育てたいかという問いに、掛下学長はこう答えた。学生たちには国際性、コミュニケーション能力、創造性などを身につけてもらいたいのが、学問を極めようとするれば、それは自然についてくると考えている。卒業しても極め続けることが力となる。

もうひとつ、その学問で成功体験をすることも大事だという。論文を発表して認めてもらうといったことでもいい。それが自信になって、違う分野の仕事にも応用出来るようになる。

「大学の4年間で、自分が極めたい学問が見つければいいなと思います。もし見つからなくても、見つけようという心を持ち続けて欲しいんです」

違うものがぶつかることが大事

「今、文理融合ということが盛んに言われていますが、私は文理融合という学問はないと考えています。文系でも理系でも、それぞれに専門を持った人がぶつかることで新しいものが生まれる。つまり文理交錯が大事だと思っています」

そのためには、それぞれが専門の学問を基礎から極めていくことが必要になる。その上で、違う思想や感覚が交錯することが大切なのだ。

「地域創成にも関係してくるのですが、違う考え方の人間がいるから、すごいものが生まれるのです。均一な集まりからは、ある程度以上のものは生まれません」

雪国の思想を生かすことが大事

そういう意味からも、福井工大が2年前に発足させた「ふくいPHOENIXプロジェクト」は魅力的だと感じている。このプロジェクトは、「ふくいと宇宙の距離を近づけよう」を目的に掲げ、「超小型衛星の開発・運用」「衛星データを防災や農業に役立てる地域振興」「宇宙を題材にした観光文化」の3つの分野に取り組むものだ。

「地域の特徴を最大限に生かす、いいプロジェクトだと思います。僕は大阪での生活が長いのですが、生まれは北海道なので、福井に来ると雪国の親近感のようなものを感じます。思想を形成するのに環境は大きな要因ですから、福井そして北陸には『雪国の思想』があるはずで、それが生かせるプロジェクトだと思いますね」

プロジェクトには全学から様々な分野の人材が参加している。最初は教員が中心だったが、3年目に入り、学生たちも参加し始めている。ここで、「雪国の思想」が、違う環境から生まれた思想と交錯すれば、新しいものが生まれる可能性が広がる。

「学生にもプロジェクトをぜひ経験してもらいたい。北陸に生まれ育った感覚を、うまく生かせるんじゃないかな」



福井工業大学／福井キャンパス1号館

広告